

台湾濁水河流域中継港〈西螺〉の成立・展開・変容 その3 1930年代市区改正以前・以後の延平路街頭

台湾濁水河流域 延平路 街屋(店屋)
西螺(雲林縣) 市区改正 寺廟

正会員 青井 哲人* 正会員 寺内 達也** 正会員 陳 穎楨***
同 河野 紗輝** 同 〇保川 あづみ** 同 辻原 万規彦****
同 今 進太郎** 同 相川 敬介** 同 恩田 重直*****
同 杉本 まり絵** 同 武田 峻哉**

1 はじめに

前稿で述べたように、西螺の都市軸である延平路では、街頭と街尾とで建物形態や土地開発の型に違いが見られた。本稿ではこのうち街頭に着目し、現存最古の地区である暗街仔と、延平路に面する市仔頭について、実測調査を中心に土地・建物の特徴を報告する。

2 暗街仔

暗街仔は街頭部分の古い街路である。現在は延平路の北に平行して走る幅員3m程度の狭隘な街路に面して、間口4m前後の町屋が並び、宅地の奥行きは北側の長いもので約40mもある。この小街路に立つと、図1のAの建物は正面を開くが、Bの建物は背を向けており、正面を延平路に開く。北東に進むと大橋路に突き当たり、向かい側に永興宮(福德正神)の正面が見える。

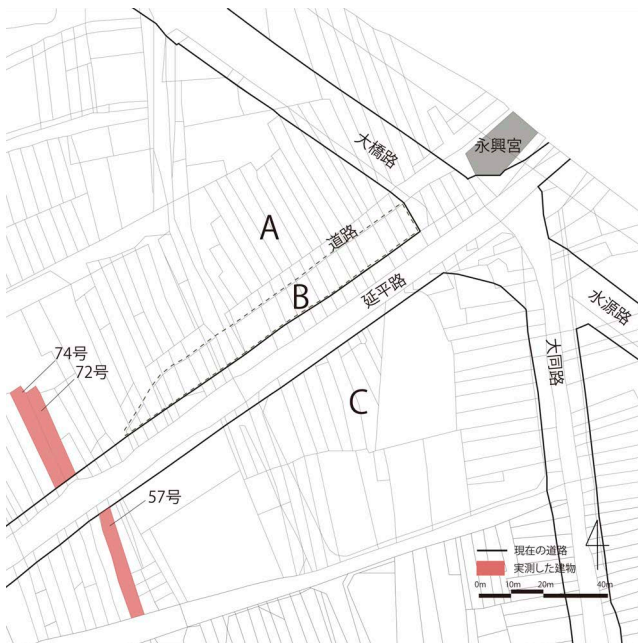


図1 暗街仔と実測建物立地(2017年8月現在 地籍圖網路便民服務系統)

地籍図(1925年)との比較 図1を1925年の地籍図(図2)と比較してみよう。図2には大橋路が存在せず、永興宮を起点とする街の構成が見て取れる。なお、図2では暗街仔の街路は官有地(道路用地)であるが、図1ではB側の私有地となっていることが分かる(経緯は不明)。

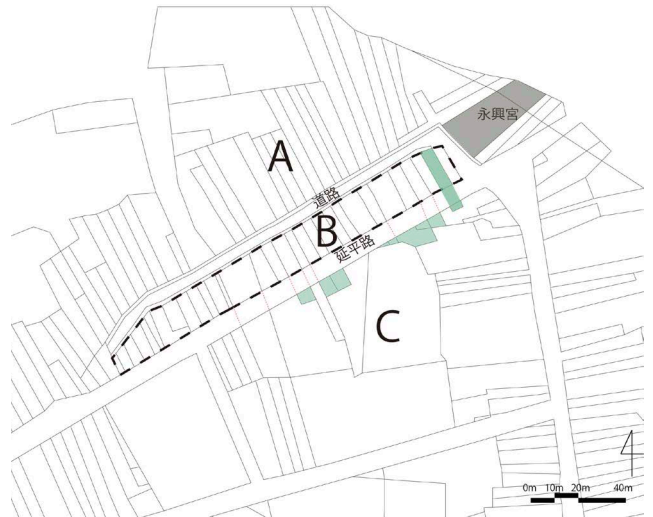


図2 市区改正以前の暗街仔(1925虎尾群西螺街西螺地圖謄本十二葉之内第五號)

また図2中、Cの緑色の網掛けで示した土地片の奥行きが極端に浅い。それらの土地境界線はBと連続し、またそれらの地番が枝番を取れば同じであることから、B-C間を走る延平路は、土地調査事業の行われた植民地初期から1935年の市区改正までのいずれかの時点で切り開かれたものとみられる。

暗街仔の建物 図3は聞き取りによって再現した建物の略平面である。面路部から庁(ホール)、その後ろに総舗付きの房間(寢室)が二室と灶脚(厨房)が並ぶ。建物は竹造である。これが暗街仔の建物の典型とみてよからう。

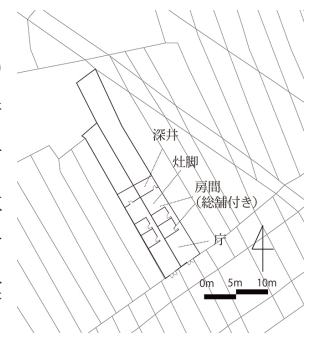


図3 暗街仔のある建物の間取り(聞き取りにより筆者作成)

3 延平路に面する建物群

次に延平路に面する3つの建物(図1)についての実測によって得られる特徴を述べる。

延平路57号 間口4,600mm、奥行き38,240mm、延平路に対してやや角度が振れた狭長宅地に立つ。現在の空間構成は、奥行き約25mのトタン大屋根が架けられた部分と、その奥の深井(中庭)および煉瓦造の建物からなり、ロット全体が店舗である。図4の断面図を

Development of Sailê(Xiluo), a junction port in the Lôchúikhoe(Zuosuishi) River Fan, Taiwan, Part 3
Reformation of Koe-Thau(town's head) District of Iânpêng-lô(Yanping Road) before and after the Urban Reform in the 1930's

*Akihito AOI **Tatstuya TERAUCHI *** CHEN Yin-Chen
Saki KONO **Azumi YASUKAWA **Makihiko TSUJIHARA
Shintaro KON **Keisuke AIKAWA ***Shigenao ONDA
**Marie SUGIMOTO **Shunya TAKEDA

みると、現在も残る母屋や古い外壁、屋根の痕跡から、大屋根部分の旧状が推察できる(図5・6)。まず、一進目の高さがファサードで2層分の高さがあるのは古い形式とは思われず、おそらく市区改正時に建て替え、もしくは増築されたのだろう。二つ目の屋根はトラスを構成するので後補とみられ、この部分はかつては深井だったと思われる。その次の棟は界壁が分厚い土確造で、表面の磚の積み方からみても古い。現在は倉庫として使われている二階を支えるために、鉄骨で補強されている。

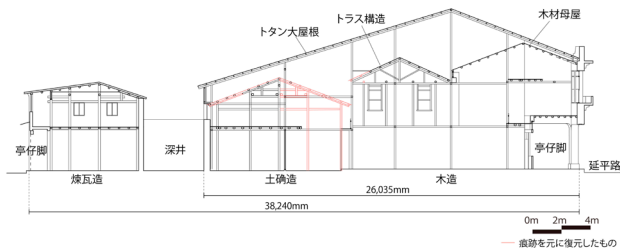


図4 延平路57号 断面図



図5 延平路57号 内部空間



図6 延平路57号 屋根の痕跡

延平路72,74号 延平路72,74,76号は、外観からは三間連棟式街屋にみえる(図7)。しかし地籍図・土地台帳から土地の所有は切れており、また実測調査によって74号の二進目が木造軸組構造で隣地と共有壁をなしていないことも確認できた。今回実測できた72,74号の平面図(図8)をみると、赤の点線で示した部分がRC造の三層建物となっており、市区改正時に面路部の店舗棟のみ三間一体の共同建て替えを行ったとみられるが、その奥行きは72号は12,105mm、74号が13,824mmと多少の違いもみられた。



図7 延平路72,74,76

現在72号は一階に集会所と倉庫を設け、二階、三階は宿泊に供されている。宅地は間口4,950mm、奥行き28,060mmで、RC造建物の奥に煉瓦造の建物が続く(図9)。

74号はロット全てが店舗として機能している。宅地は間口3,850mm、奥行きは30,000mm前後である(実測困難)。RC造建物の奥に木造穿斗式の建物、その奥に

RC造の建物が続く。図10の写真に示したように、74号の木造建物の小舞壁と72号の洋式煉瓦造の壁が二重になっている。現在、この木造建物の軸部や壁はほとんど装飾的に残されるのみで、隣家の壁から鉄骨でガラスの屋根を架け、店舗の内部空間を成立させている。

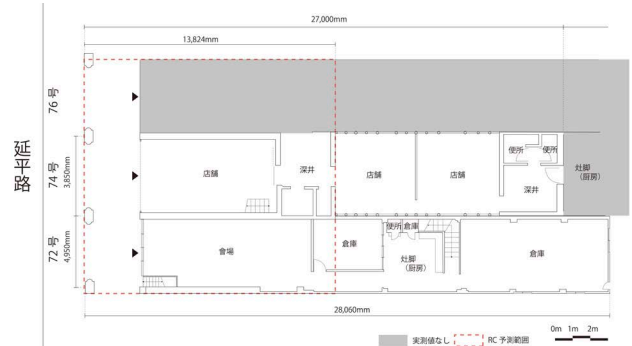


図8 延平路72、74号 平面図



図9 延平路72号 屋根裏



図10 延平路74号 76号の壁

4 むすびに

以上のように、街頭では間口4m弱～5m弱、奥行き30m～40mといった狭長宅地が支配的であり、清朝時代から植民地中期までは連棟式の町屋はほとんどなく、宅地毎に竹造や木造の平入建物を2～3棟、間に深井を挟んで奥行方向に並べるものであった。植民地期以降、とくに1935年の市区改正事業で延平路が拡幅されたのに伴い、道路に面する部分を2～3層の煉瓦造ないしRC造に建て替えるケースが多いが、奥には古い建物が残される傾向がある。その両方が、近年の観光地化の趨勢のもとで店舗空間をつくる要素として活用され、歴史の重層性を見せている。他方、暗街仔の北側では建て替えはあまり進んでおらず、数棟の竹造町屋も残されるほどである。

次稿では、街頭とは異なる土地開発の型を示す街尾に目を移し、実測調査の成果を報告する。

*本稿は科学研究費補助金基盤研究(B)「台湾都市史の再構築のための基盤的研究：都市の移植・土着化・産業化の視座から」(代表：青井哲人、平成27年～31年度)の成果の一部である。

* 明治大学理工学部建築学科 教授・博(工)
 ** 同大学大学院理工学研究科 博士前期課程
 *** 博(工)
 **** 熊本県立大学環境共生学部居住環境学科 教授・博(工)
 ***** 法政大学エコ地域デザイン研究所研究員・博(工)

*Professor, School of Science & Technology, Meiji University, Dr Eng. / **Master's Course, Graduate School of Science & Technology, Meiji University / ***Dr Eng. / ****Professor, Faculty of Environmental & Symbiotic Sciences, Prefectural University of Kumamoto, Dr Eng. / ***** Researcher, Laboratory of Regional Design with Ecology, Hosei University, Dr Eng.